

昭和28年6月16日第三種  
郵便物認可 昭和42年2月  
月14日国鉄東局特別扱承  
認新聞紙第四八九号

## 号外

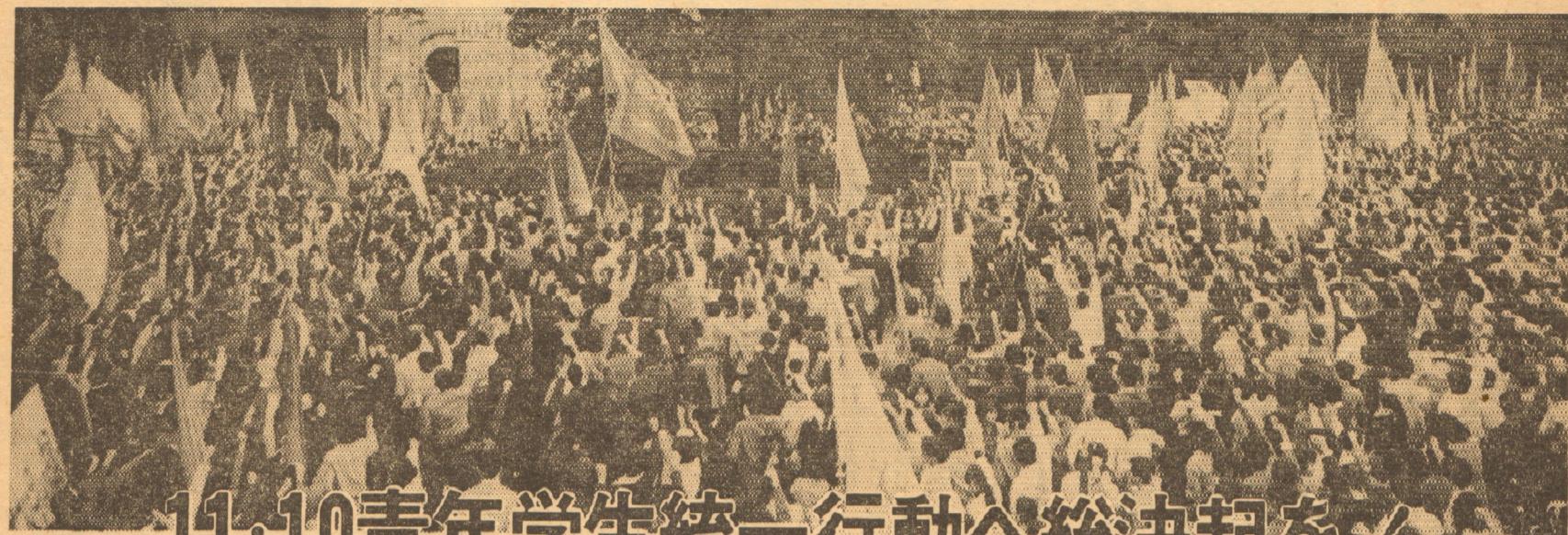
(大学生版)

11月5日(水)

(1部 5円)

日本民主青年同盟  
中央委員会  
東京都渋谷区  
神山町4  
大代表(468)5301  
振替口座東京106690  
定価25円月100円15円

## 民主青年新聞



## 11・10青年学生統一行動へ総決起を!



これが「通達」  
さる10月8日、「全共闘」が姿を消したあと、法政大学一階施設部の黒板に書かれてあったもの。

トロッキスト各派の「10・21」は歴史的東京  
結成し東京では駅前大物語で学生中央集会をおこなったあと、中央大集会に参加し、一万七千五百名が決起したほか、全国各地で計六万余の学生が統一行動に参加し、大学立法院、大学民王化、安保闘争、沖縄全面戦争、暴力と民主主義破壊の「全共闘」一派純粋・解体のたたかいの意を高め示す一大デモンストレーションをおこなった。この10・21統一行動の成果のうえにたって全学

会連など学生十五団体は10・21実行委員会を結成し東京では駅前大物語で学生中央集会をおこなったあと、中央大集会に参加し、一万七千五百名が決起したほか、全国各地で計六万余の学生が統一行動に参加し、大学立法院、大学民王化、安保闘争、沖縄全面戦争、暴力と民主主義破壊の「全共闘」一派純粋・解体のたたかいの意を高め示す一大デモンストレーションをおこなった。この10・21統一行動の成果のうえにたって全学

## ・13ストライキに連帯し、労働者の11

## 佐藤訪米に抗議し、労働者の11

# 「4機、山田さんに連絡をとること」とのこと

## —機動隊と法政「全共闘」の親密な関係—

「明日の予定」全共闘書記局より  
4機、山田さんに連絡をとること  
ガサ入れ(家名複数)情報し  
いれること  
会計に金をもつていくこと、  
確実にこのむ

これまで「全共闘」が警察と  
電話帳は機動隊、公安關係の電  
話番号でヒヤンリ。

これまで「全共闘」がおさわされ  
むすびついていることほりいろ  
とり沙汰されていたが「まさか  
ないせいだらうか、もう一つ大き  
な情勢のほうがついでいる。  
いだらうか、それともマスコミ  
がこういう問題に限ってとりあけ  
ハナハナしく機動隊と渡りあう  
法政大の「全共闘」の黒板連絡で  
ある。

さる十月八日、法政大学に機動

隊が出动したさい、同大学の教職

員組合がこれを発見した。

別に学生自治会室の黒板には

「今朝、ガサ入れあり、泊まる

などの「全共闘通達」も書かれ

件が発見されたばかり。

表ではハナハナしく「攻防」を

ある。

10・21当日、テレビにうつる

突入をほかつたことしかり、で

てもこの「八百長」、プロ野球の

百長よりずっと危険である。

古くて新しいことである。

る。……陰謀家たちの主要な

が、すでにマルクスが科学的

特徴は警察との闘争である。

社会主義を確立した時代に

彼らの警察にたいする闘争は

も、「全共闘」のような輩は

存在していた。

マルクスはこう言つてゐる。「これらの人々は、自分での事件をおこしては「と  
りしまり」の口実で治安体制を強化してきた。

これまで時の権力者のやり方  
は、自分で事件をおこしては「と  
りしまり」の口実で治安体制を強  
化してきた。

これまでも時の権力者のやり方  
は、自分で事件をおこしては「と  
りしまり」の口実で治安体制を強  
化してきた。

これが警察どうしの連絡のとり  
いではない。

これは警察どうしの連絡のとり  
いではない

## 一、奇妙な同情論

## 民青同盟は訴える

・21」と「全共闘」一派の「10・21」とのあまりにも鮮やかな対比のまえに、このばかりはマスコミもジャーナリズムも、「全共闘」一派の国民の中での「孤立」について報道せざるをえなかつた。「朝日ジャーナル」十一月一日号も、今度ばかりは「アラリオに不可欠な『民衆の大海上』がほとんどあたたらしく、なんらかの意味で政治的衝撃（あるいは効果）とも繋がるすかつた」ことを無むなしにみとめざさねなかつた。かれらのことを「新左翼」というめあたらしいことばで呼称し、かれらが民主運動の何らかの「ヘルニア」であるとか、「全共闘」の提起した「根柢の問い合わせ」とかについて、あふれるばかりの言葉の洪流をあびせかけてきたところの、いわゆる「進歩的ジャーナリズム」も、かれらの「やり方はまちがつている」（中巣鷺「朝日」十月二十二百付）といわざるをえなくなつたのである。

たしかに「おめえら、機動隊がこわいのかどう」「民青はコロシてもいいんだよう」といしながら、鉄パイプをふるって、医療労働者、看護婦さんたちの隊列にぎりかかり、労働組合の宣伝カーを燃え打ちにするその姿はどうみても「新左翼」とはよべるものではなき、「新右翼」としかいよいのないものであつた。

だがここで、われわれは「10・21」以降の自称「進歩的ジャーナリズム」のなかに奇妙な論調があることを指摘せざるをえない。

「若者」、というのは、あそこでまで追いこんでしまつたらいけないものなんだ」「共産党や社会党のデモが許可になつて、若者たちのデモだけが不許可になるといふ、こうしたやう方が、若者たちを狂暴の反乱に追いやつたのだ」と一部の人々はいう。警察の過剰な「警備」と「非常体制」こそが、かれらを商店街でしかあればならないところまで追いこんだのだ、「既成左翼」が「若者」たち

下封頭されていていた大学において、最近次々と機動隊によってそれが解除されてきた。そしてそのあとは、きまつたようにロッカーハウスが一定期間おこなわれ、授業が再開されようとしている。学生諸君は続々と学園に登校してきた。しかし、いくつかの大学では機動隊が長期駐留、「機動隊大学」として運営しようとしているところまでて、学内における学生の自治活動は極度に制限され、抑圧されている。

また、一部の大学では、機動隊と「全共闘」一派の「いちぢり」と「二の「衝突」」がくりかえされている。

こうしたなかで多くの学友は、「全共闘」一派によって荒らされ、薙書きされ、破壊された学園の現実を、怒りをもつて見つめつ今後、自分たちはなにをするべきなのか、を真剣に考へ、クラスの導入は、「闘から部分」に対する压殺だなどといふ「全共闘」一派の虚偽なアジョは、もはや「神通力」を失なった。我々は見

## 二、学園の自主的再建の旗印

ていかなければならない。半生大會をはじめ、自治会の正規の機關の機能の復権をはからなければならぬ。  
それはいま、大學に対してよれをたらさんばかりに介人の機会うかがる政府、反動勢力に対する最大の反撃ではないだろうか。  
まだそれは同時に、學園民主化、自主的再建にむけてのあらたな闘かいの巨歩となるものである。

現任、反動勢力は学友自守派、自分の判断で、「正しい」と思つたことを「正しい」と言い、そして行動することを何よりも恐れているのだ。君たちがもし行動にたらがつたらしく、新聞はたちまち書きたてるだろ。「日共系・一般学生」が「收拾」にのりだした、と。そして、「ずるい」民青が「なぐみに」一般学生の氣分を「利用」している、と。

い。  
学友諸君！  
政府、自民党、警察はいま、何をねらっているのか。かれらは「いたぢがっこ」をねらい、機動隊の常時駐留化をねらっている。  
そして「紛争大學」というレッテルをはり、その大學の死命を制する非常大權（「大學法」の「成立」）によつてそれを手に入れたとしている。少しつてむごくの大字に対しても発動できること、これがかれらの当面のねらいである。かれらはすでに「大學問題審議会」委員の任命を終り、これを発足させた。お膳立てはすことにとのつた。そして非常大權をもつたあとで、建設すべき「モデル大學」、「新幹線大學」の構想の夢をふくらませてゐる。近く、中教審はさらに抜本的な大學教育に対する「答申」をだすといふ。  
われわれをよくめて多くの学友がひつてゐる。「全其闘」一派の「無期限バリ・スト」はもうこりこりだ。そしてともかく、いま授

ていかなければならない。半生大會をはじめ、自治会の正規の機關の機能の復権をはからなければならぬ。  
それはいま、大學に対してよれをたらさんばかりに介人の機会うかがる政府、反動勢力に対する最大の反撃ではないだろうか。  
まだそれは同時に、學園民主化、自主的再建にむけてのあらたな闘かいの巨歩となるものである。

現任、反動勢力は学友自守派、自分の判断で、「正しい」と思つたことを「正しい」と言い、そして行動することを何よりも恐れているのだ。君たちがもし行動にたらがつたらしく、新聞はたちまち書きたてるだろ。「日共系・一般学生」が「收拾」にのりだした、と。そして、「ずるい」民青が「なぐみに」一般学生の氣分を「利用」している、と。

# 民主青年新聞を よもう

# 民青に利用されるな

かからぬす、学生運動について「田井（民青）系」  
と「吉川（反民）系」の二大派閥の「抗争」が学園

らこそ「10・21は『軍事的』発動からみれば、かなりの成功だった。少佐たちは二一日後の記者会見で胸を張った。一、「朝日ジャーナ

業は始まつた（始まるところ）といつてゐる。それはいい。だが問題はさうさきに次の点にある。

政府、自民党は「紛争」を「收拾」することにねらいがあるのであるのではなく、「大学法」をいつても、どこでも「適用」し、そしてあわよくば「それを機に大学にいたる警察権力の無制限の介入をばかこう」としていふこと。「全共闘」一派は依然として「十一月決戦」の力闘を変更せず（学友諸君のまえにでていう「マヌーバー」はど

わが國へ、ケバルト政権をまだ一度も且「批判したことではない」ということ。したがつて依然として「パリケード→機動隊導入」という「いたちごっこ」の危険性は去っていない、ということ。したがつて、われわれはいまこそ、われわれ自身の力によって、この事態を解決していかなければならぬということである。それはなほよりも、政府、自民黨の反動的大學再編政策を粉砕し、大學園生花を実現するためだ。